



10月×日

秋祭りの会場に到着した。「遅かったやん!」「さっそく焼いて!」。あちこちから声がかかる。工プロンをつけて焼きそばを焼きはじめる。と、教え子が子どもを連れて焼きそばを買いに来てくれた。向こうでは消防団員をやっている別の教え子が、子どもたち相手の風船釣り屋をしている。

さあ今年も200玉の焼きそば、一気に焼くか!

* * *

教員になって3年目、放送部のAという生徒が、タバコを吸って謹慎になりました。当時は、担任でも生徒指導部でもない教員が家庭訪問をすることは、考えられないことでした。でも、わたしはAの家に行きたかったのです。なぜなら、Aは校区の被差別部落（以下、部落）I地区の出身で、わたしはどうしても部落に行ってみたかったのです。この時の気持ちは、正直「好奇心」でした。

家庭訪問の行き、I地区の中にあるスーパーマーケットから飛び出した小学生とわたしの運転するバイクが接触しかけました。「あっ」と思った瞬間、その子どもがこけました。その時、スーパーから1人の従業員らしき人が飛び出してくださいました。「お前、どこに行くねん」「わたし、高校の教員で、いまから家庭訪問に行く途中です」。すると、その人は見ず知らずのわたしに向かって「そうか、わかった。あとはなんとかしたる。お前は家庭訪問に行ってこい」と言ってくれました。

家庭訪問の帰りにスーパーに寄って、その子どもの家を教えてもらいました。「菓子折ぐらいは持って行けよ」のアドバイス通り、菓子折を持ってその家に行って謝り、その一件は終わりました。後日、再びスーパーに行って、「いろいろありがとうございました。とてもいい人で、『ええよ、ええよ』と言ってもらいました」と報告しました。すると、その人は「そうか。よかったな。そやけどあそこのおじいちゃんは、怒らせたらこわい人やで」と笑いました。「え?」と言うと、その人はこ

う続けました。「学校の教員で、担任でもない人間がうちのムラに家庭訪問に来るのは初めてや。お前、なんかしようと思って来たんやろ?今まで、いろんな人がうちのムラに来た。でも長続きせえへんかった。細くてええから、長うかかわってくれな」。その人は当時、部落解放同盟の支部長をしておられたNさんでした。

Aとのつながりをきっかけに、翌年、先輩の教員と、週1回I地区で学習会をはじめました。そこに集まった生徒たちの姿は、学校で見せるそれとはまったく違いました。学校ではちょっと「突っ張った」姿を見せなくてはならない生徒も、集会所ではとても素直な顔で勉強します。勉強が終わると「先生、ありがとうな」と声をかけてくれます。進級のあぶない友だちを思いやり、試験前にその生徒の行方を捜して連れてきてくれる子もいました。そんな子どもたちの姿は、わたしに子どもたちの生活の場に行くこと、そこで子どもたちをつなぐことの大切さを教えてくれました。

やがてわたしはI地区の人々に空き家を探してもらい、I地区に住むことにしました。結婚後も、わたしたち家族はI地区に住み続けました。わたしたちは、I地区の皆さんにとても大切にもらいました。朝起きたら、家の前に野菜が置いてあるのはいつものことです。わたしたちも、保護者としてPTAの役員をしたり、地域の住民として子ども会活動に力を注いだり、とても「太い」つきあいが続きました。I地区はわたしたちに、地域で生きることや、そこでどういうつきあいをしていけばいいのかなど、たくさんのこと教えてくれました。そして、15年間のI地区での生活の後、京都市内に引っ越しすることになりました。

今はI地区とのつきあいは、地域の秋祭りなど、年に数回行く程度になりました。でも、やっぱりわたしたちにとってI地区は故郷です。「細くても長く」というNさんとの約束は、やっぱり守りたいなあと思っています。（高校教員 土肥いつき）

※部落の人たちは、自分たちの住むところを愛着を込めて「ムラ」と呼びます。